

[Review]

Development and related problems in the study of paternity

Yumi Hiruta*

* Aino Gakuin College

Key words : identification, attachment, maternal-infant bonding, gender, psychological androgyny

父性研究の変遷と課題

蛭田由美*

はじめに

ドイツの精神分析学者 Mitscherlich が「父親なき社会」を著したのは1963年であり、邦訳されたのは1972年であった。折しも、経済の高度成長の頂点に達し、男性被雇用者がモウレッツ社員として仕事に没頭していた当時の日本でも、父親の不在という感覚が多くの人々の共感を得たが、まだ父性研究には着手されていなかった。アメリカにおいては、1976年にLamb (1976) が「父親の役割」を著したのを契機に、盛んに父性研究が行われることになった。

日本では、1989年から6年間にわたって行われた厚生省「心身障害研究」における平山ら (1995) の「少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究」、1993年に柏木 (1993) が著した「父親の発達心理学」などにより、ようやく本格的に父性研究がスタートした。

本稿は、これまでの父性・母性研究の領域や変遷を概観することによって、今後の父性研究の課題を明らかにすることを目的としてまとめた。

1. 発達心理学における父性・母性研究

親に関する研究の視点は、子どもの発達の要因としての父親と母親の役割規定に置かれてきた。その方向付けをした発達理論として、主にFreud, Bowlby, KlausとKennellなどの理論をあげることができる。

1) Freud 理論における母親と父親

1895年「ヒステリー研究」の発表以来Freudは、広義の性エネルギーであるリビドーがどのように充足されたかが子どもの人格発達をのちのちまで決定すると考えた(懸田・高橋 1971)。そのため、授乳・離乳、排泄訓練などが乳幼児のリビドーの満足を定めるものとして重要視され、その役割を果たすのが母親であるため、母親は乳幼児の発達にとって最も重要な存在で、子どもの人格形成にまで及ぶ決定的な役割をもつものとみなされることになった。これに対して父親は、乳幼児に対してほとんど影響ないものとみなされていたが、児童期後期(エディプス期)になって初めて子どもの発達にとって重要性が注目されることになった。子どもにとって父親の存在意義は、父親の持つ規範を子どもが内在化させ、自我を形成することにあるとした。そのため、父と子は理性という距離をおいた関係であり、初期からの密着した母との関係とはっきり区別されるものとなった。さらに、男の子の性役割の形成も父親からであるということから、父親の役割が強調され、このような役割を担う父親は、男性的で力が強く理性的であることが理想的とされた。

Freudの理論は、ウィーンを中心としたハプスブルク王朝時代の中流階級の親子関係を背景としていた。当時、父親は生計のために外で働き、母親は家庭にあってもっぱら家事と育児にあたり、母子関係はきわめて密接で相互に強く依存し合うというものであり、それが理想とされていた。こうした背景のもとに、Freudは母親の絶対的重要性、親との同一視、エデ

* 藍野学院短期大学

イプス・コンプレックスなどの理論によって当時の親子関係の理想像を理論化したといえる。

このような父親と母親の役割分担が多くの文明社会で一般的であったことが、Freud 理論を受け入れやすくし、Freud 理論は、その後の発達心理学や家族社会学に大きな影響を与えた。Freud 以後の精神分析では、父親の役割として超自我の形成や性役割の獲得よりも、乳幼児期の母親と子どもの共生的関係を断ち切る、すなわち母と子の絆を切断する役割が強調されるようになった。アメリカの社会学者 Persons (1955) は、Freud 理論の同一視説を前提としている伝統的な父親像を、家族の構造と機能の視点からより明確に理論化した。Persons は、母親の子どもを慈しみ養育し、温かい安心感を与える愛情やいたわりなどの共感的機能を表出的役割とし、危険や緊張の多い外の世界で家族のために働き、社会経済的な達成を遂げる父親の役割を道具的（手段的）役割とした。さらに、父と母の機能分化は単に親としての役割にとどまらず、社会での男女の役割分化とも対応しているとしている。子どもは、こうした父親と母親の異なった機能を知り、自分が父あるいは母のいずれかと同性（同一）であることを認識し、同性の親から持つべき機能を学ぶというものであった。このように、Persons は Freud の同一視説を性役割の獲得理論にまで発展させた。当時のアメリカ社会の男女のあり方が Freud 理論と一致したからである。

2) Bowlby の愛着理論

Bowlby (1951) によると、一人では生存できない乳児は、泣く、笑う、しがみつくとという生来的に備わった機能を駆使して母との接触を求め、他の誰よりも特定の人すなわち母親に対して愛着 (attachment) を示すという。他方、母親の側にも生得的に乳児の信号に敏感に反応するプログラムが備わっており、母親は子どもの愛着の最初の、最重要な対象であるとした。母と子の絆が強く結ばれ、母親に対する愛着がしっかりと築かれたとき、それを心の安全基地 (secure base) として子どもはさまざまな困難や課題に対処でき、情緒的にも安定した人になるという。

Bowlby の愛着理論の構築のきっかけとなったのは、ホスピタリズム (hospitalism) の問題であった。親の死亡や家庭の貧困などの理由で乳児院、孤児院、病院などで育つ乳児に罹患率や死亡率が高いことが知られており、栄養や衛生などの保健衛生上の対策により罹患率や死亡率は一定の改善をみた。しかし、施設に

育つ子どもの発達上の問題は、身体面にとどまらず、知的発達の遅れ、情緒的人格障害などの心理面にも認められるようになり、心理学者や精神科医の研究課題にもなった。これにより、子どもの発達にとって家庭や親の存在は欠かすことができないものと考えられるようになった。第二次世界大戦後、戦争孤児の増加に伴って世界的な課題となったこのホスピタリズムの問題に WHO がとり組むことになった。研究を依頼されたイギリスの精神科医 Bowlby は、1951 年 WHO に研究成果を報告し、乳幼児と母親との人間関係が親密かつ継続的で、しかも両者が満足と幸福感にみたまされるような状態が、乳幼児の精神衛生や人格発達の基礎であるとした。そして、施設で育つ子どもはこのような望ましい母子関係を欠いていることから、母性剝奪 (maternal deprivation) という概念を提唱した。このマターナル・デプリベーションという概念は、ホスピタリズムすなわち病院や施設という場で起こる症状の説明概念となった。

この理論の中でも、子どもの発達に対する父親の役割はほとんど認められず、母親の心理的サポートという限定された補助的な役割が考えられているにすぎない。

Bowlby の理論はその後の乳児研究を活発にし、母子間の相互作用や子どもの愛着形成に関する多くの研究を促した。Ainsworth (1969) は、安定した愛着は母親の子どもへの敏感さによることを明らかにし、愛着の形成における接触の量 (時間的長さ) よりも、接触や交流の質の重要性を指摘した。また、母親がフルタイムの仕事を持ち、昼間は保育所で育てている子どもたちを対象とした研究 (Belsky と Steinberg, 1978; 繁多, 1981) は、保育所の子どもたちの母親への愛着は、専業主婦の母親をもつ子どもたちの母親への愛着と変わりなく強いことを明らかにした。さらに、幼少時の愛着は、Bowlby が当初結論づけたほど安定したものではないこと、愛着の対象も主な養育者である母親だけに限定されたものではないことなどが明らかになってきた。Bowlby 自身も最近では (1988)、 「これまでの研究で親とは母親をさしていたことはほとんどしかたがなかった」と弁明し、安全基地という概念の中心となるのは両親による養育であると訂正するようになった。

3) Klaus と Kennell の「母と子の絆 (maternal-infant bonding)」

それまで多くの研究者が取り上げてきた課題は、乳

幼児がその母親に対して抱く愛着に関するものであったが、アメリカの小児科医である Klaus と Kennell (1976) は逆の方向、すなわち母親が子どもに対して結びついていく過程を取り上げた。彼らは、未熟児および疾病新生児集中治療ユニットの熟練した医師としての経験から、治療内容の高度専門化と制度化が母親と子どもを分離し、家族との緊密な接触から遠ざけ、そのことが引き起こす弊害を危惧した。未熟児や病気の子どもを持つ両親、先天性の奇形を持つ子供の両親、子どもが死亡した場合の両親の調査を通して、母親から子どもへの愛着がどのようにして生じて発達し、成熟していくか、何によって歪められ妨げられるか、また高められるかを明らかにした。彼らは、愛着の成立過程で決定的な要素となるものとして、次の7つの原則を示した。

この Klaus らの主張は、高度に専門化された周産期医療管理の弊害に目を向けるという大きな意義のあるものであった。そして、『未熟児新生児室という閉ざされた僧門の扉が開かれ、両親が招き入れられた』と評価された。また、従来母子関係の研究においては、子どもに焦点が当てられていたのに対して、母親の側の問題に焦点が当てられたという意味も大きい。しかし、彼らの調査の対象が貧困の未婚の母親であったという対象の偏りや、被験者が調査対象であることを自覚することによって結果が影響を受けるという、いわゆるホーソン効果などの方法論的不備が指摘され、統

愛着形成の7原則

- ① 生後数分ないし数時間の間に、一つの感受期 (sensitive period) が存在し、その後子どもが理想的な発達をするためには、この期間に母親及び父親が生まれたばかりの自分の子どもと親密に接触することが必要である。
- ② 人間の母親及び父親は、最初自分の子どもを手渡されると、その子どもに対して種特有の反応を示す。
- ③ 愛着の成立する過程は、父親及び母親が一時に一人の子どもだけに、最も理想的な形で愛着を抱くように形づくられている。
- ④ 母親が自分の子どもに対して愛着をつくりあげる過程においては、子どもの側から体や眼の運動といった何らかの合図 (signal) によって、子どもが母親に反応する事が必要である。
- ⑤ 分娩の過程を目撃した人は、生まれた子どもに強い愛着を感じるようになる。
- ⑥ 大人でも人によっては愛着と分離 (detachment) の過程を同時に経験することは困難である。すなわちある人に愛着を成立させながら、同一の人または他の人の死や死の危険を嘆き悲しむということはできない。
- ⑦ 初期に起こる事件は、ときには長期にわたり影響を与える。生まれて最初の日に一過性の異常を持っていた子供の健康を心配したことが永続的な心配を生み、それが後日まで尾を引いて影を落とし、子どもの発達を不利な方向に形づくる。

(Klaus & Kennell, 1976)

制された方法で追試的研究が行われた。その結果、出産直後に愛着形成の臨界期があり、それによる発達の初期経験を過大に評価することは行き過ぎであるとされるに至った。この理論の中でも、子どもとの絆の形成の重要人物として焦点が当てられているのは母親であって、父親はサポート的な役割を与えられているに過ぎない。しかし、折からの分娩を両親が関与する人間的な営みに戻そうという運動、すなわちラマーズ法出産の流れと共に、父親のサポートの重要性は次第に重要視されるようになり、夫 (父親) の出産への立ち会いが妻のサポートとして重要であるのみならず、その後の子どもの愛着形成を促すという考えが広がっていった。Klaus からも直ちに出した改訂版では、父親と子供の絆についての実験を行った章を追加し、現在では、英語版は “parent-child bonding” と訂正している。

その他の父性研究では、アメリカの精神医学者 Greenberg (1974) が、夫 (父親) の出産立ち会い体験からその後の子どもの愛着形成の過程を研究し、エンgrossメント (engrossment: のめり込み、没入感情) という概念を発展させ、「父親の誕生」を出版した。Greenberg は、父親が生まれたばかりのわが子と早期接触をすることは、没入感情を触発するのに有意義であるとし、早期からわが子に没入感情を持った父親は、子どもの成長発達と共に関わりを持ち続け、そのような父親は家庭内での価値と自尊心が高まったように感じるという結果を報告した。

このように、子どもの発達に焦点を当てて始められた発達心理学の分野での母子関係に関する研究は、当初の母親の愛情を重要視する見方から、子どもにとって愛着の対象として重要なのは母親だけに限らないことが証明され、父親による養育の重要性を浮かび上がらせた。また、母親の側の問題に焦点を当てた研究は、母性愛や母親による養育性が生得的なものでなく、諸体験や学習によって得られるものであることを確認することとなった。すなわち、育児は母親である女性だけが発揮できる機能ではなく、父親である男性にも十分その機能を果たす可能性があることを示した。

2. ジェンダーの概念の導入

1960年代に始まった女性解放運動やフェミニズムの隆盛とともに、子育てにもジェンダーやアンドロジニーの概念が導入され、もう一人の親である父親が子育てにより積極的に参加することが求められるように

なった。

人間の心理的機能や行動について性差を区別し、比較し記述する性差研究は、やがて何が性による心理や行動などの差異をもたらしたのかという性差の原因、性差形成のメカニズムを究明する性役割研究へと向かっていった（東と小倉 1982, 1984）。性格、興味、行動などの性による差異は、文化や社会によって異なり、社会文化的に形成されることを示す研究知見が次々と提出された。性差は、それまで一般に考えられていたほど固定的でも明確でもなく、時代によって変動が激しかったりあいまいであることが明らかになった（原と我妻 1974）。それまで、生物的身体的性差によって決まると考えられていた心理的・社会的な性差は、人が育つ社会・文化が男女に期待する役割や特性によって大きく左右されると考えられるようになった。こうした性役割研究の中で父親は、依然として Freud の同一視の概念を基盤に、性的社会化の役割を持つものとして注目されていた。

1963年に Friedan の「新しい女性の創造」(1963)、1970年に Millet の「性の政治学」(1970) が出版され、性役割研究の動きは、女性解放運動やフェミニズム運動と連動していった。Friedan と Millet は、従来の女性の理想像と現実のあり方を批判し、性役割分業と性別の「らしさ」に対する期待がこれまでの人々の生き方、特に女性の生き方を規制してきたと指摘した。フェミニズムは、これまでの学問を女性の視点から問い直し、男女を含めた人間に関する研究をめざす女性学を開拓したが、性役割の発達研究の視点はフェミニズムの主張と合致し、女性学の重要なテーマとなった。そして、フェミニスト達は、性役割 (sex roles) という語には**生物学的に規定された特質である性 (sex)** が含まれていて、**社会文化的な役割としての性 (gender)** と混同されるとして、ジェンダーの概念の構築にとり組んだ (Maccoby 1966)。こうして、ジェンダーの研究は国際比較や歴史的な変遷など多角的、学際的な取り組みが行われ、性役割分業と性別の「らしさ」の構造は自由・平等・博愛の理念に基づいて徹底的に批判され、ジェンダーの概念が次第に共有されていった (柏木 1993)。

一方、男女の心理的性差は男性性 (男らしさ) と女性性 (女

らしさ) を両極とする一次元上で捉えられてきた。しかし、心理的には男性にも女性的・母性的な心理面があり、女性にも男性的・父性的な心理面があると考えられるようになった。一人の人間が男性性と女性性を同時に持ち合わせ、両価値が統合された男女両性具有性が男女を問わず人間の発達の目標であり、最も望ましい発達であるとする **アンドロジニー (androgyny)** の概念の展開であった (Singer 1976)。Bem (1974, 1975) はアンドロジニー概念のもと、両性具有性を測定するために男性性と女性性を独立の二次元で測るスケールの開発にとり組んだ。彼女は、次の3点でアンドロジニー概念の意義を認めた。それは、(1) 個人の選択範囲を広げること、(2) 性ステレオタイプからの逸脱というストレスからの解放、(3) 従来の女性性は劣るという性差の評価を否定するという点である。男性性の特性は**作動性 (agency)** で、これは個人の自己維持、自己主張、自己拡大の機能の活発さであり、女性性に固有の特性は**共同性 (communion)** で、集団成員の中での協調性、宥和性が高いなどの機能である。図1は、男性性と女性性の次元と性役割を表したものである (Bem 1976)。M と m は男性性役割傾向の強弱を表し、F と f は女性性役割傾向の強弱を表している。性役割タイプは図のように4つのタイプに分類され、男性性も女性性もともに高いものを **androgyny (両性性役割型)** 型、男性性の高いものを **masculinity (男性性役割型)** 型、女性性の高いものを **femininity (女性性役割型)** 型、男性性も女性性もともに低いものを **undifferentiated (未分化型)** 型と呼ぶ。この性役割タイプの中で、androgyny 型は物事の考え方が柔軟で、行動範囲が広く状況に応じて最適な行動を効果的に遂行することができ、心理的にも健康であるとされた。

アンドロジニー概念は、父親・母親研究に大きな影

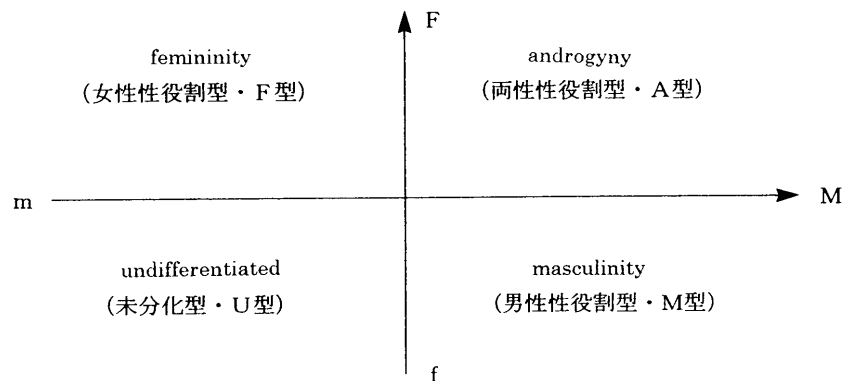


図1 男性性—女性性の次元と性役割タイプ (Bem 1976)

響をもたらすものと考えられる。男性であって自己主張があり行動力があると同時に、親切で気持ちが細やかで人に暖かい人がいるし、女性であってかわい気がありやさしく素直であると同時に、自主的で行動範囲が広い人もいる。そして、このような人が人生のさまざまな課題によく対処できるということは、子どもの養育についても同じことが言えることになる。アンドロジニー概念は性役割超越論にまで発展し、人格発達は幅広いさまざまな可能性の中から男性性、女性性とらわれることなく、自由に柔軟にその時々状況によって最も有効なものを選んでいく過程であり、それが新しい人格構造の発達であると考えられるようになった。

3. 日本における父性研究

わが国にホスピタリズムの概念が導入されたのは、第二次世界大戦後と考えられる。1952年には、厚生科学研究費による総合研究のテーマとして、ホスピタリズムの問題が取り上げられている。以来、ホスピタリズム研究やBowlbyの愛着理論に触発された母子関係論が、保健医療や福祉の分野を動かすことになった。母子保健や児童福祉に関する「答申」や「白書」が、子どもの健全育成のための母親による家庭保育の重要性を強調し続けることから明らかである。

心理学の分野で花沢（1992）が1970年代の初めから母性心理学の樹立に向けて、母性の原理、母性の差異、母性の形成と発達などの研究を始めた。彼は、妊産婦の心理に関する研究は多くの場合産婦人科医師や助産婦によってとり組まれ、心理学者はあまり関心を持たなかったと指摘した。その理由の一つとして、母性や母性愛を女性が生得的に持っている固有の特性とみなしてきた社会通念をあげている。これに対して産科心身医学、助産学、母子看護学の領域では、臨床的に母性に関する固有の特性に反する事例に接することが多くなり、母性心理の研究に取り組まざるを得なかったであろうと推測している。花沢は、母性は後天的な諸体験や学習によって形成発達するものであるという立場に立ち、母性意識や母性感情の測定のための尺度の開発にとり組んだ。特に花沢の開発した「対児感情評定尺度」は、子どもに対する接近と回避の感情を同時に測定し、その拮抗状態を算定するものであるが、母親に限定することなく父親にも、また一般にも使用可能な育児性尺度として期待されるものである。

大日向（1988）は、母親の愛情を絶対視する研究知

見が政治経済上の要請から強調された経緯を示しながらも、心理学の研究知見のみが育児における母親の重要性を強調する社会的風潮を生み出したのではないと考えた。すなわち、わが国には母性信仰が文化的風土として根強く存在しており、そのような風土が母親の愛情を絶対視する知見を受け入れやすくしたという。そこで、従来の母性信仰への懐疑を出発点として、母性役割受容、子どもに対する愛着の個別性を明らかにし、その発達変容の様相の検討にとり組んだ。また、大日向は、育児は産む能力イコール育てる能力といえるほど単純な領域ではなく、それぞれの社会にとって未来の人間像を予見する文化の型の集約ともいえる領域であるという。したがって、人間にとって子どもを育てることは男女両性の成人における広義の養育欲求・養育行動として把握されるべきものであり、その営みは「育児性」として表現されるのが適切であると提唱した。大日向のこのような考え方は、アンドロジニー概念の性役割超越論と一致する。

医療看護の分野における父親研究については、臼井ら（1996）がその動向をまとめた。

臼井らによると、医療看護分野における父性研究は、1974年から始められたが1983年までの10年間で10件と非常に少なく散発的であったが、1984年から急増した。研究の主な内容は、父性意識の影響因子、父性意識の形成過程、父性意識の実態であった。また研究の対象となった時期は、妻の妊娠と出産の時期および育児期に集中していた。研究者の専門領域は、最も多くを占めたのは看護職特に助産婦であった。これは、1970年代の半ばからラマーズ法出産の動きが活発になり、この臨床実践の中で父親への関心が向けられていったものと考えられる。また、KlausとKennellの「母と子の絆」が1979年に翻訳され、周産期医療の実践に大きな影響を与えた。多くの病院で、出産後の母子の早期接触（early contact）の試みが行われ、母子異室制という母子管理体制が見直され、夫（父親）の出産への立ち会い、父親の育児参加が奨励され、この臨床実践を裏付けるために数多くの調査が行われた（上田ら 1983；鈴木と近藤 1989；小宮山と新道と近藤 1989）。

1975年、合計特殊出生率は1.91を示し、その後の政府の家庭重視政策によっても改善することなく、1989年ついに1.57にまで低下した。これは「1.57ショック」といわれ、各界に大きな衝撃を与えた。少子高齢化による人口の減少が社会にもたらす危機感から社会的な子育て支援策の充実が求められ、1994年

文部・厚生・労働・建設4省合同の「エンゼルプラン」が打ち出された。こうした経過の中で、総務庁青少年対策本部（1988）は「子どもと父親に関する国際比較調査」を行い、アメリカ、西ドイツの父親と比べ、日本の父親は子どもや家族との関わりが極端に少ないことを明らかにした。現在、保健、医療、福祉、教育などの分野での学際的な父性研究が進められている（柏木 1993；平山 1995；牧野と中野と柏木 1996）。

4. これからの父性研究の課題

日本の父性研究は、欧米の潮流に大きく影響を受けながら発展した。現在では、少子高齢社会の到来による危機感から、子育てにおける父親の果たす役割の重要性は社会的なコンセンサスが得られたといえよう。しかし、父親の子育ての重要性は少子現象への対応として考えられ、子育てによる父親自身の生活の豊かさの実現や、豊かな人格的発達の実現には結びついていない。さらに、父親の子育て参加の促進の前には、日本型企业社会の構造という大きな壁がある。経済界という壁である。

世界に例を見ない日本の高度経済成長は、男性労働者の長時間重労働によって支えられていたことはいまでもなく、伝統的な性別役割分業の中で、男性は常に経済成長の担い手として私的生活面を忘れて働くことを期待されてきたといえる。日本の男性労働者の長時間労働は海外からの批判的にもなり、政府もその改善に動いたがめだた改善は得られなかった。1988年政府は「世界とともに生きる日本—経済運営五カ年計画」と題する経済計画を打ち出し、週40時間労働の実現と年間総実働時間を1993年までに1,800時間程度に短縮することをうたった。政府統計によると（労働省1998）、1985年の年間総実働時間の国際比較は、日本2,168時間、アメリカ・イギリス1,900時間台、西ドイツ・フランス1,600時間台であった。その後日本の製造業・生産労働者の実労働時間は、1990年2,124時間、1995年1,975時間、1996年1,993時間と徐々に短縮されていった。しかし、1988年当時5年後を目標とした1,800時間にはまだ遠い実情にある。ちなみにアメリカ・イギリスでも1995年、1996年は1,900時間台に留まっている。男性に超長時間労働を強いる日本型企业社会の構造は、これまでは家事育児を負擔することのない男性の働き方を期待するものであった。したがって、父親の家庭団らんや子どもとの交わりによる幸福の追求、生活者としての日々の暮ら

しの充実などは犠牲にされてきたといえよう。

1994年に発表された「エンゼルプラン」の重点施策は、家庭における子育て支援、仕事と家庭の両立のための雇用環境の整備、多様な保育サービスの充実、生活環境の整備であった。この重点施策の実現は1999年为目标とされていたが、現在進められているものは、緊急整備目標として掲げられた保育所の整備のみとあってよいであろう。現在最も遅れているのが企業・職場における子育て支援策である。したがって、企業・職場における子育て支援や父親の働き方と子どもの発達との関連などはほとんど研究されていない。わずかに、こども未来財団（1999）が行った「中小企業の子育て支援に関する研究」、平成9年度厚生省心身障害研究（1998）の「少子化についての専門的研究」の「少子社会に対する企業および労働組合の意識と対応に関する調査研究」があるのみである。また、これまで紹介した父性研究も、父親自身を対象にした研究は少なく、ほとんどが子どもや妻からみた父親、夫の実態や期待などであった。

近年、少しずつではあるが父性研究が行われるようになり、子育てに積極的にとり組む父親の姿も見られるようになってきた。父親自身の手になる子育て体験記を目にすることも多い。このような父親の子育て体験記の多く（男の子育てを考える会、1987；大下、1996；藤原、1998、2000；広岡、2000）が、日頃の育児の積み重ねなしに「父」になることはできず、子育てを通して父親も人間として成長すると述べている。こうした体験談は一部の父親の実感として終わらせるのではなく、科学的に実証されなければならない。したがって、父性研究の今後の課題として、育児が父親の人格発達や生活の豊かさおよび影響に関する研究、父親による育児の経済的効果に関する研究、企業・職場における父親の働き方の改善に関する研究などが必須であると考えられる。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S. and Wittig, B. A. (1969) Attachment and exploratory behaviour of one-year-olds in a strange situation in B. M. Foss (ed.) Determination of infant behaviour, vol. 4, London: Methuen; New York: Barnes & Noble.
- 東 清和, 小倉千加子 (1982) 性差の発達心理, 大日本図書
- 東 清和, 小倉千加子 (1984) 性役割の心理, 大日本図書
- Belsky, J. & Steinberg, L. D. (1978) The effects of daycare: A critical review, Child Develop-

- ment 49: 929-949
- Bem, S.L. (1974) The Measurement of Psychological Androgyny, *J. Consult. Clin. Psychol.* 42 (2): 155-162
- Bem, S.L. (1975) Sex Role Adaptability: One Consequence of Psychological Androgyny, *Journal of Personality and Social Psychology* 31 (4): 634-643
- Bem, S.L. Martyna, W. & Watson, C. (1976) Sex Typing and Androgyny: Further Exploration of the Expressive Domain, *Journal of Personality and Social Psychology* 34 (5): 1016-1023
- Bowlby, J. (1951) Maternal care and mental health, Geneva: World Health Organization, 黒田実郎 (訳), 乳幼児の精神衛生, 岩崎書店, 1-54頁, 1962
- Bowlby, J. (1988) A Secure Base, Clinical application of attachment theory, 二木 武 (訳), 母と子のアタッチメント——心の安全基地——, 医歯薬出版, 12-16頁, 1993
- Friedan, B. (1963) *The Feminine Mystique*, W. Norton, 三浦富美子 (訳) 新しい女性の創造, 大和書房, 1965
- Greenberg, M. (1974) Engrossment: The Newborn's impact upon the Father, 竹内 徹 (訳), エングロスマメント (没入感情: のめり込み)——父親に与える新生児のインパクト——, *ペリネイタルケア*, 13 (11): 955-966
- 花沢成一 (1992) 母性心理学, 医学書院
- 原ひろ子, 我妻洋 (1974) しつけ, 弘文堂
- 平山宗宏監修 (1995) 少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究, 平成6年度厚生省心身障害研究報告書
- 広岡守穂 (1990) 男だって子育て, 岩波新書
- 藤原和博 (1998) 父生術, 日本経済新聞社
- 藤原和博 (2000) 子は父を育てることがある——パートナーシップのすすめ——, *助産婦雑誌*, 54 (9): 776-780
- Klaus, M. H. & Kennell, J. H. (1976) *Maternal-Infant Bonding*, C. V. Mosby Company, 竹内 徹, 柏木哲夫 (訳), 母と子のきずな, 医学書院, 1979
- こども未来財団 (1999) 中小企業の子育て支援に関する調査報告書, 財団法人こども未来財団
- 子ども家庭総合研究所 (1999) 平成10年度厚生科学研究 (子ども家庭総合研究事業) 報告書, 子ども家庭総合研究所, 3-278頁
- 柏木恵子編著 (1993) 父親の発達心理学——父性の現在とその周辺——, 川島書店
- 懸田克躬, 高橋義孝 (訳) (1971) 精神分析入門 (正・続), フロイト著作集第1巻, 人文書院
- 小宮山要, 新道幸恵, 近藤潤子 (1989) 父親の育児参加と母親の不安, *小児保健研究*, 48 (2): 132-133
- 厚生省監修 (1998) 平成10年版厚生白書——少子社会を考える, ぎょうせい
- Lamb, M. E. (1976) *The Role of the Father in Child Development*. John Wiley & Sons Inc.
- Maccoby, E. E. (1966) *The Development of Sex Differences*, Stanford University Press 青木やよひ, 池上千寿子, 河野貴代子, 深尾凱子, 山口芳枝 (訳), 性差——その起源と役割, 家庭教育社, 1979
- Millet, K. (1970) *Sexual Politics*, Doubleday & Co. 藤枝零子 (訳), 性の政治学, ドメス出版, 1985
- Mitscherlich, A. (1963) *Auf der Weg zur Vaterlosen Gesellschaft, Ideen zur Sozialpsychologie*, R. Piper & Co. Verlag. 小見山実 (訳), 父親なき社会——社会心理的思考——, 新泉社, 1972
- 牧野カツコ, 中野由美子, 柏木恵子編 (1996) 子どもの発達と父親の役割, ミネルヴァ書房
- 大日向雅美 (1988) 母性の研究, その形成と変容の過程: 伝統的母性観への反証, 川島書店
- 大下勝己 (1996) 地域における男性と子どもの育て合い——現場からのレポート——, 子ども家庭福祉情報, 12: 56-61
- 男の子育てを考える会編 (1987) 男の育児書, 現代書館
- Persons, T. (1955) *Family, Socialization and Interaction Process*, Free Press, 橋爪貞雄 (訳), 核家族と子どもの社会化, 黎明書房, 1970
- 労働省「年間総実働時間の国際比較 (製造業・生産労働者)」(1998) 平成10年版厚生白書, 181頁, ぎょうせい
- 繁多 進 (1981) 保育園児及び家庭児におけるアタッチメントの発達, 母子研究, 4
- Singer, J. (1976) *Androgyny: Toward a New Theory of Sexuality*, 藤瀬恭子 (訳), 男女両性具有 I——性意識の新しい理論を求めて——, 人文書院, 1981
- 総務庁青少年対策本部編 (1988) 日本の父親と子ども——アメリカ・西ドイツとの比較, 「子どもと父親に関する国際比較調査」報告書, 大蔵省印刷局
- 鈴木悦子, 近藤潤子 (1989) 初めて父親となる男性の妊娠・分娩・産褥1カ月の経験過程の分析, *日本看護科学会誌*, 9 (3)
- 鈴木不二一 (1998) 少子社会に対する企業及び労働組合の意識と対応に関する調査研究, 厚生省心身障害研究, 少子化についての専門的研究, 平成9年度研究報告書, 345-391頁
- 臼井雅美, 渡部節子, 谷崎 恵 (1996) 父性意識に関する文献研究——看護・医学領域に視点をあて——, *母性衛生*, 37 (2): 283-288
- 上田礼子, 小沢道子, 景山隆之, 平山宗宏, 入内島明美, 唐沢陽介 (1983) 夫立ち会いによる分娩とその意義に関する追跡的研究 (第2報), *母性衛生*, 24 (2): 116-121